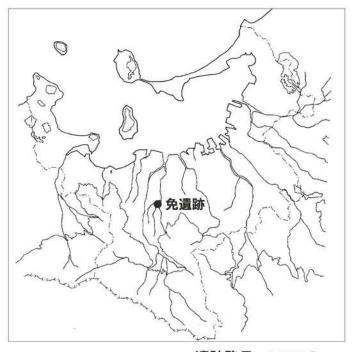
免遺跡 2

一 第3次調查報告 一



遺跡略号 MEN-3 調査番号 0712

2009

福岡市教育委員会



1. 埋設土器(1)



2. 大洞系土器 (238)



3. 天河石 (414)

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、金屑川河川改修工事に伴い調査を実施した免遺跡第3次調査の成果を報告するものです。 今回の調査では弥生時代の自然流路から多量の土器・石器などが出土しました。これらは、当時の 賀茂地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 山 田 裕 嗣

例 言

- 1. 本書は金屑川河川改修工事に伴い、早良区賀茂四丁目地内において発掘調査を実施した免遺跡第3次調査の調査報告書である。
- 2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 3. 本書で使用した遺構の呼称は、溝をSD、ピットをSPと略号化している。
- 4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
- 5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、土器を今井が、石器を山口譲治、山口朱美が行った。
- 6. 本書に掲載した挿図の製図は米倉法子、山口朱美、今井が行った。
- 7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
- 8. 石器については山口譲治氏の御教示を得た。
- 9. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 10. 本書の執筆・編集は今井が行った。

本文目次

第1章	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1. 訂	周査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2. 訓	間査の組織	1
第2章		2
		4
		4
		······································
		31
弗 4 早	あわりに	31
	挿図目次	第32図 天河石分析チャート
第1図	免遺跡と周辺の主な遺跡(1/100000)	表目次
第2図	調査地点と周辺の調査区(1/8000)	
第3図	調査区位置図(1/1000)	第1表 出土石器観察表
第4図	調査区全体図(1/200)	
第5図	調査区土層図(1/60)	図版目次
第6図	埋設土器出土状況実測図(1/10)	
第7図	埋設土器実測図(1/3)	図版 1
第8図	SD01出土遺物実測図(1/3)	1. 1区砂層上面全景(北より)
第9図	3層出土土器実測図①(1/3)	2. 1区砂層上面全景(西より)
第10図	3層出土土器実測図② (1/3)	3. 1区完掘状況(北より)
第11図	3層出土土器実測図③(1/3)	4. 1区完掘状況(西より)
第12図	3 層出土土器実測図④ (1/3)	5. 2区砂層上面全景(東より)
第13図	3層出土土器実測図⑤ (1/3)	6. 2区完掘状況(東より)
第14図	3層出土土器実測図⑥ (1/3)	図版 2
第15図	3層出土土器実測図⑦(1/3)	1. 北壁土層 (南東より)
第16図	3層出土土器実測図⑧(1/3)	2. A6~C6土層(南より)
第17図	3層出土土器実測図⑨(1/3)	3. B3~F3土層(南東より)
第18図	25 · 26層出土土器実測図 (1/3)	4. 試掘トレンチ西壁土層(南東より)
第19図	4層出土土器実測図(1/3)	図版 3
第20図	5層出土土器実測図①(1/3)	1. SD01完掘状況(南より)
第21図	5層出土土器実測図②(1/3)	2. SD02 (北より)
第22図	3、5層出土土器実測図 (1/3)	3. SD03完掘状況(北より)
第23図	6層出土土器実測図(1/3)	4. SD03完掘状況(南より)
第24図	8層出土土器実測図(1/3)	5. 埋設土器出土状況(北より)
第25図	砂層出土土器実測図(1/3)	6.322出土状況(北より)
第26図	層位不明土器実測図(1/3)	図版 4 出土遺物 I
第27図	土製品·玉実測図 (1/2、1/1)	図版 5 出土遺物 Ⅱ
第28図	出土石器実測図①(1/1)	図版 6 出土遺物Ⅲ
第29図	出土石器実測図②(1/1)	図版7 出土遺物Ⅳ
第30図	出土石器実測図③(1/1)	図版8 出土遺物 V
第31図	出土石器実測図④(1/1)	

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年8月31日、下水道局河川部河川建設課(現道路下水道局河川部河川整備課)より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課(現埋蔵文化財第1課。以下、埋文1課)に対して、福岡市早良区質茂四丁目地内における河川改修工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋文1課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である免遺跡および次郎丸高石遺跡に隣接していることから、平成19年4月18日に試掘調査を実施した。試掘トレンチで4箇所を確認した結果、トレンチ2において現地表下約90~110cmで弥生時代前期の遺物包含層を確認した。この結果に基づいて申請者と埋文1課は協議を行い、遺跡の存在が予想される部分を対象として、記録保存のため発掘調査を令達事業として実施することで合意した。発掘調査は平成19年5月14日から同年6月29日まで実施した。整理作業と報告書の刊行は平成20年度に行った。

調査番号	0712	遺跡略号	MEN-3	
調査地地積	早良区賀茂四丁目地内	分布地図番号	野芥83	
開発面積	5,000m ²	調査実施面積	250m ²	
調査期間	2007.5.14~2007.6.29	事前審査番号	17-1-60	

2. 調査の組織

調查委託:下水道局河川部河川建設課(現道路下水道局河川部河川整備課)

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括:埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治(前任) 田中壽夫(現任)

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務:文化財管理課 管理係 井上幸江 事前審査:埋蔵文化財第1課 事前審査係 星野惠美 調査担当:埋蔵文化財第2課 調査第1係 今井隆博

調査作業:尾崎泰正 小田義之 菅野武 柴藤清志 田中昭子 永井ゆり子 西口キミ子

西嶋ムラ子 西嶋洋子 野田英機 土生ヨシ子 脇坂ミサヲ

整理作業:柴田加津子 萩本恵子

尚、発掘作業から報告書作成に至るまで、道路下水道局の方々をはじめ地域住民等関係各位には 多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の立地と環境

早良平野は福岡市西部に位置し、福岡平野と糸島平野に挟まれている。北は博多湾に面し、南は 育振山地・東は油山丘陵・西は長垂丘陵に画されている。平野内は室見川・金屑川などの多くの支 流が縦断し、平野内の地形形成に影響を及ぼしている。免遺跡は早良平野のほぼ中央東寄りに位置 し、金屑川の右岸にある。周辺には西に次郎丸高石遺跡、東に野芥大藪遺跡、野芥遺跡がある。

本調査地点は免、次郎丸高石両遺跡の隣接地にあたる。調査地点南東にある賀茂小学校では免遺跡第1次調査(鶴町遺跡)が実施されており、自然流路から柵状遺構が検出され、弥生時代前期~ 古墳時代の土器とともに大量の木製品が出土している。また、本調査地点より300mほど南では外環 状道路建設工事に伴い2次調査が行われ、古墳時代の流路からアーチ状の井堰が検出されている。

早良平野における弥生時代開始期の主な遺跡には、平野のほぼ中央付近に有田遺跡群がある。室見川と金屑川に挟まれた独立中位段丘上に立地し、旧石器時代~近代までの遺跡が存在する。弥生時代開始期前後には遺跡の南半に環濠が築かれ、当該期の中心的集落と思われる。遺跡の南西端には夜臼式土器が大量に出土した第62次調査地点(七田前遺跡)がある。有田遺跡群の西、室見川と十郎川の間には福重稲木遺跡・橋本一丁田遺跡・拾六町平田遺跡・石丸古川遺跡など、当該期の遺物が大量に出土した遺跡の密集地域となる。これらの遺跡は自然流路や河川跡が多く、明確な遺構は少ない。有田遺跡群の南には免遺跡・次郎丸高石遺跡・野芥大藪遺跡・田村遺跡などがある。次郎丸高石遺跡では溝状遺構から突帯文土器が出土している。早良平野の南端には四箇遺跡・重留遺跡・清末遺跡などがあるが、遺物の出土は少ない。



第1図 免遺跡と周辺の主な遺跡(1/100000)

- 1. 免遺跡
- 2. 次郎丸高石遺跡

22. 岩本遺跡

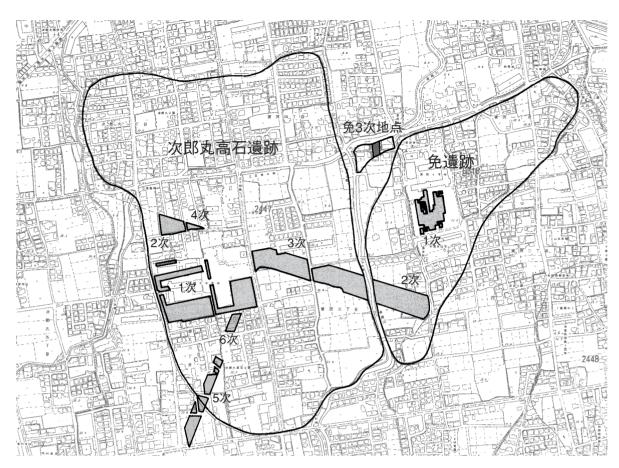
25. 清末遺跡

26. 浦江谷遺跡

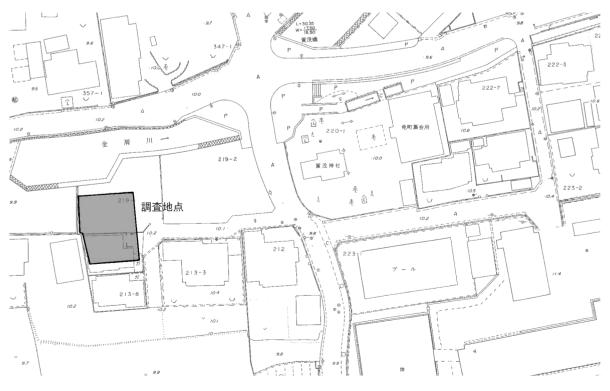
23. 東入部遺跡

24. 四筒古川遺跡

- 3. 下山門遺跡
- 4. 大又遺跡
- 5. 拾六町ツイジ遺跡
- 6. 湯納遺跡
- 7. 石丸古川遺跡
- 8. 牟多田遺跡
- 9. 拾六町平田遺跡
- 10. 橋本一丁田遺跡
- 11. 福重稲木遺跡
- 12. 藤崎遺跡
- 13. 有田遺跡群
- 14. 有田七田前遺跡(有田62次)
- 15. 原遺跡
- 16. 原東遺跡
- 17. 野芥遺跡
- 18. 田村遺跡
- 19. 四箇遺跡
- 20. 古田遺跡
- 21. 重留遺跡



第2図 調査地点と周辺の調査区 (1/8000)



第3図 調査区位置図 (1/1000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

平成19年5月14日から表土剥ぎに着手し調査を開始した。表土剥ぎの際の廃土は場外に搬出し、人力掘削による廃土は調査区を2つに分けて場内で処理することとした。調査区内を2mのグリッドに区画し、東西をアルファベット、南北を数字であらわしグリッド番号を付けた。そして、5列と6列を境として、南側を1区、北側を2区として掘り進めた。本調査区は微高地の端と谷の部分にあたり、包含層の堆積が主で人為的な遺構はほとんど見られない。南西隅にわずかに黄褐色粘質土の微高地がかかり、東と北に向かって落ちていく地形である。微高地部分の標高は9.4m、谷の底の砂礫面は約8.6mである。一部深いところは8.2mを測る。

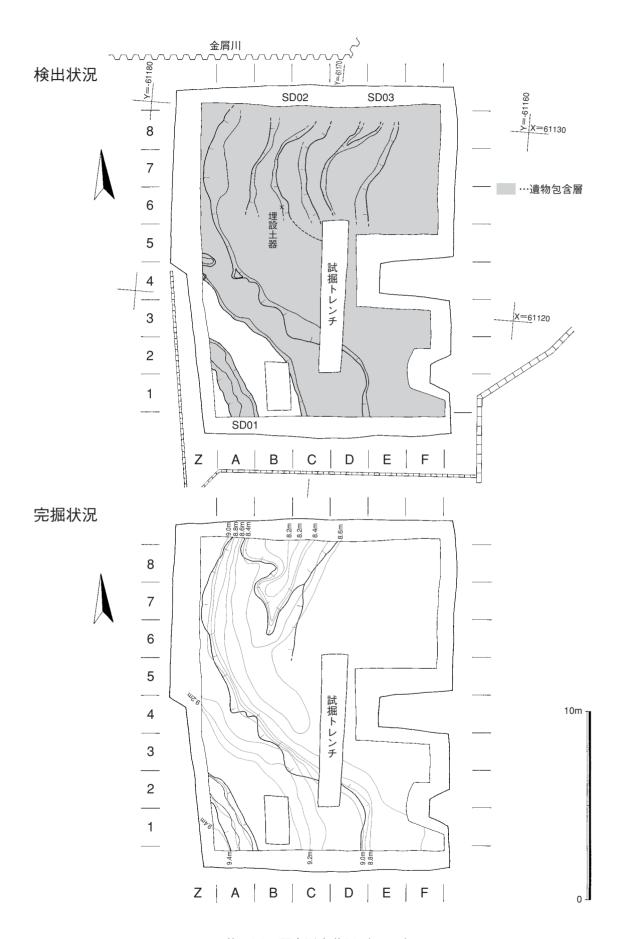
検出した遺構は埋設土器 1 基と自然流路 3 条である。掘削は先に設定した 2 mグリッドを基準に掘り進め、出土遺物の大半はグリッド単位で取り上げた。第 4 図の薄い網掛け部分は遺物包含層の分布範囲で、調査区のほぼ全面を覆っている。流路の覆土下部は砂と粘土の互層で、その上に黒褐色粘質土が堆積していた。黒褐色粘質土は上層(3 層)と下層(5 層)に分けて遺物をとりあげている。遺物は 3 層のものが最も多い。出土遺物は夜臼式土器が中心で、板付式土器が少量共伴する。土器には煤が付着したものも見られる。その他に土製紡錘車、大洞系土器、磨製石斧、磨製石剣の切先、天河石(アマゾナイト)などが出土した。黒曜石片は500点以上出土し、石鏃・石錐・掻器・削器・使用痕剥片・残核などがある。また黒曜石原石も出土している。遺物は総量でコンテナケース約30箱分出土した。

2. 層序

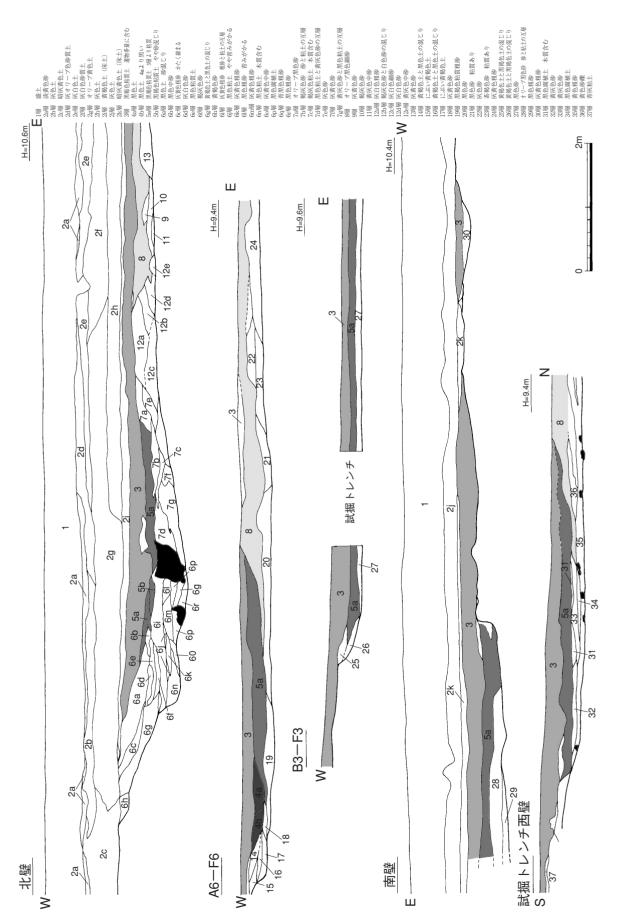
第 5 図は北壁、A 6 - F 6 ベルト、B 3 - F 3 ベルト、南壁、試掘トレンチ西壁の土層図である。北壁における地表面からの基本層序は、1 層:盛土(約60cm)、2 a \sim 2 e 層:灰色土(約20cm)、2 g 層:オリーブ黄色土(約40cm)、2 i 層:黄褐色土(約5 cm)、3 · 5 層:黒褐色粘質土(5 \sim 40cm)、6 層:黒褐色細砂、粗砂、砂礫となる。

掘削時の平面観察からは土質の識別が難しく、流路の把握が困難であったが、土層断面からは比較的明瞭に識別することができた。北壁土層では砂の高まり(12層)を挟んで両側に流路が見られる。西側のSD02では黒褐色粘質土($3\cdot 5$ 層)の下は砂と粘土が層状に堆積している($6\cdot 7$ 層)。高まりの東側では浅い窪み(SD03)に8層が落ちこんでいるのが確認できる。A6-F6ベルトでは、3層と5層の間に黒色土(4層)を確認した。4層は狭い範囲に分布するようであるが、出土遺物は比較的多く、接合できる資料も多い。B3-F3ベルト、および南壁では3層、5層ともに水平気味の堆積となっており、礫層もほぼ平坦になっている。試掘トレンチ西壁では3 層と5 層の落ちが確認できる。

黒褐色粘質土の下は砂層、その下は礫層となる。調査最終段階で重機による深掘りを行ったが、 礫層の下を確認することはできなかった。遺物の大半は3層からの出土で、4層・5層にもある程 度見られる。その下の砂層などからも少量出土している。遺物は極力分層して取り上げたが、境界 が不明瞭な部分や壁からの落ち込み、層の誤認などで混じり込みもあると思われる。



第4図 調査区全体図 (1/200)

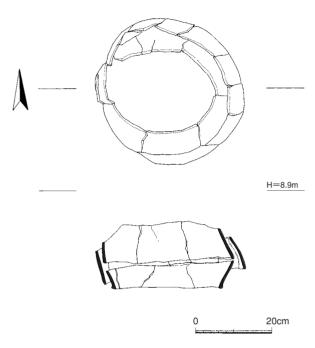


第5図 調査区土層図 (1/60)

3. 遺構と遺物

①埋設土器 (第6図、図版3-5)

B6グリッドの5層からの出土である。SD02の窪み部分で検出した。口縁部を下にした倒置状態である。検出段階では掘方を確認することはできなかったが、倒置状態であること、土器がまとまった状態であることから埋設土器と判断した。屈曲部付近で割れ、潰れた状況で出土した。胴部下

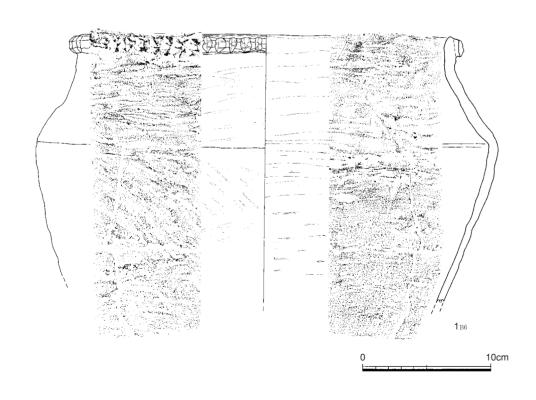


第6図 埋設土器出土状況実測図 (1/10)

半から底部を欠くが、破損部分の標高はおよそ 8.8mで、これは3層と5層の境目付近の高さと 一致する。本来は底部まであったものが流路の 浸食により破壊され流されたのか、あるいは 元々底部を欠いた状態で埋められたのかは不明 である。

出土遺物 (第7図、巻頭図版1)

突帯文系の屈曲甕である。口径31.0cm、遺存高21.0cm。胴部で屈曲するもので、口縁部のみに刻目突帯を施す。突帯は口縁部にほぼ接する位置に若干下向きに貼り付けられている。突帯の幅は大きく、厚みもある。また、刻目も大きく、貝殻で施文されている。調整は粗雑で、外面は擦過痕、内面にはナデ、擦過痕、ケズリ状の痕跡が見られる。早良平野における同様の屈曲一条甕と比較すると粗雑な印象を受ける。



第7図 埋設土器実測図 (1/3)

②自然流路

SD01 (第4図、図版3-1)

調査区南西隅の微高地部分で検出した。幅はおよそ1.2mであるが、深さは15cm程度しかなく遺存 状況は非常に悪い。覆土は黒褐色粘質土で、谷部の3層と同一層と思われる。底面にはわずかに砂 が残っている。断面はゆるいU字形で明瞭な掘り込みは確認できないこと、谷の落ち際の方向とほぼ 平行に並んでいることから、SD01は自然流路の浸食によるもので、後の浸食・削平により窪みの底 だけが遺存したものと判断した。

出土遺物 (第8図、第31図)

突帯文土器・板付式土器が少量出土した。2~7は突帯文系の甕口縁部である。突帯が口縁部より下がるもの、口縁部に接するもの、刻目が指頭のもの、棒状工具によるものなど様々である。8・9は板付系甕の口縁部である。ともにヘラによる刻目を端部全面に施す。10・11は壺の肩部で、平行沈線を施す。12~15は底部である。12は台形状に張り出す夜臼式甕の底部である。

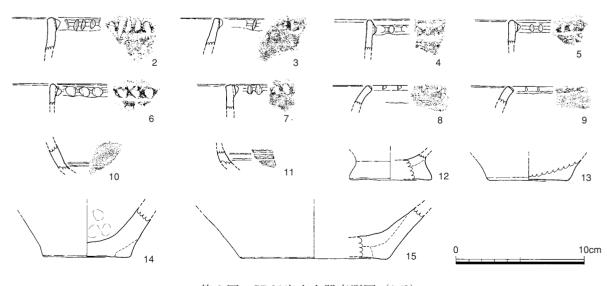
また、石器は太型蛤刃石斧、黒曜石製石鏃未製品、削器、石核、使用痕剥片などが出土している。 466は今山産と思われる玄武岩で、現存の長さ12.0cm、幅6.65cm、厚さ4.9cmである。敲打製形後に 頭部から体部にかけ入念に研磨を加え、半円状の頭部を作り出し、横断面形は楕円形に仕上げてい る。使用中に欠損したものであろうか。

SD02(第4図、図版3-2)

谷部のB4からB8付近で3層を除去した段階で検出した。先に調査を行った1区部分では明瞭な流路は検出できなかったが、北側の調査成果を踏まえると、3層下の5層はSD02に伴うものであったと思われる。よって、SD02は南東から北西に流れていたものと思われ、8層、砂層を除く出土遺物の大半はSD02のものと思われる。1区では3層・5層およびその下層は平坦な砂礫層であるが、北側はB7付近で急激に深くなり、堆積層も砂・粘土・腐植土などが見られる。出土遺物は谷部のものでまとめて報告する。

SD03(第4図、図版3-3、4)

調査区北東部で3層を除去した段階で検出した。幅2m前後、深さ20~30cmである。砂層(12層)を削っている。D5より南側では平面・土層断面ともに溝状のものは確認できていないことから、D5付近で途切れるのか、あるいは東側に曲がっているものと思われる。出土遺物はほとんどない。



第8図 SD01出土土器実測図 (1/3)

谷部及びSD02・03出土遺物

SD02・03を含む谷部出土遺物をまとめて報告する。なお、土器については出土層毎にまとめて掲載しているが、土製品・玉、石器は層に関わらずまとめて報告する。

(1) 土器

3層出土土器 (第9図~第17図)

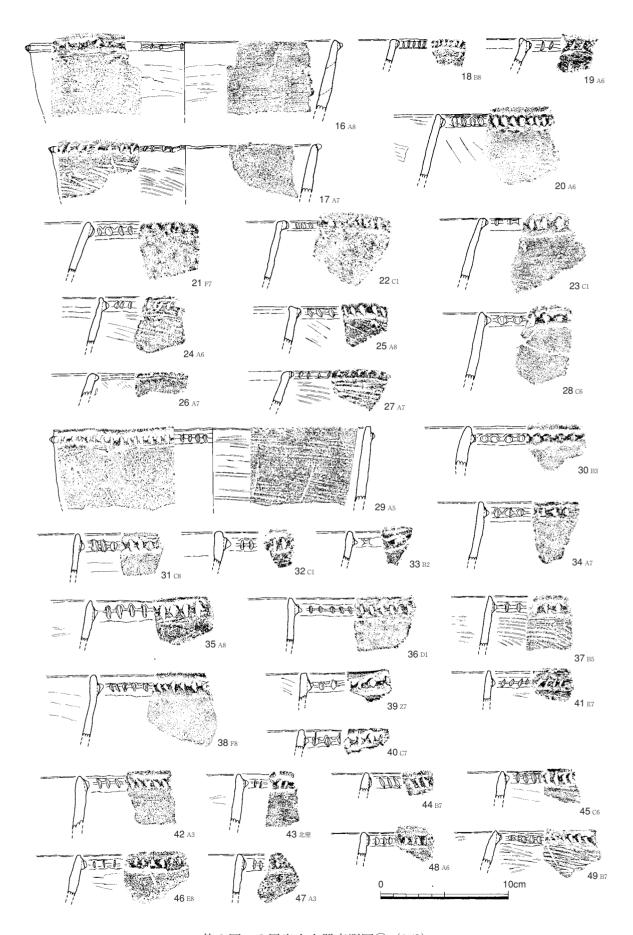
谷部上面のほぼ全面を覆う層である。16~140は口縁部に刻目突帯を施す砲弾甕、141~164は屈曲甕、165~173は板付系の甕である。174~190は浅鉢、191~250は壺、251·252は椀形土器、253·254は高杯である。255~313は深鉢・甕、浅鉢、壺の底部である。大半が小片のため、復原径・傾きが不正確なものも多いと思われる。

突帯文系の砲弾甕は口縁部の傾きで大きく分けた。16~28は口縁部から直線的にすぼまる胴部を持つものである。突帯は口縁部に近いものが多く、刻目はヘラ、棒状工具のものが多い。26は摩滅のため不明瞭であるが、刻目を施していないように思われる。28は指頭による大きな刻目を有する。16・27は外面に条痕が見られる。他のものは板ナデ、擦痕である。

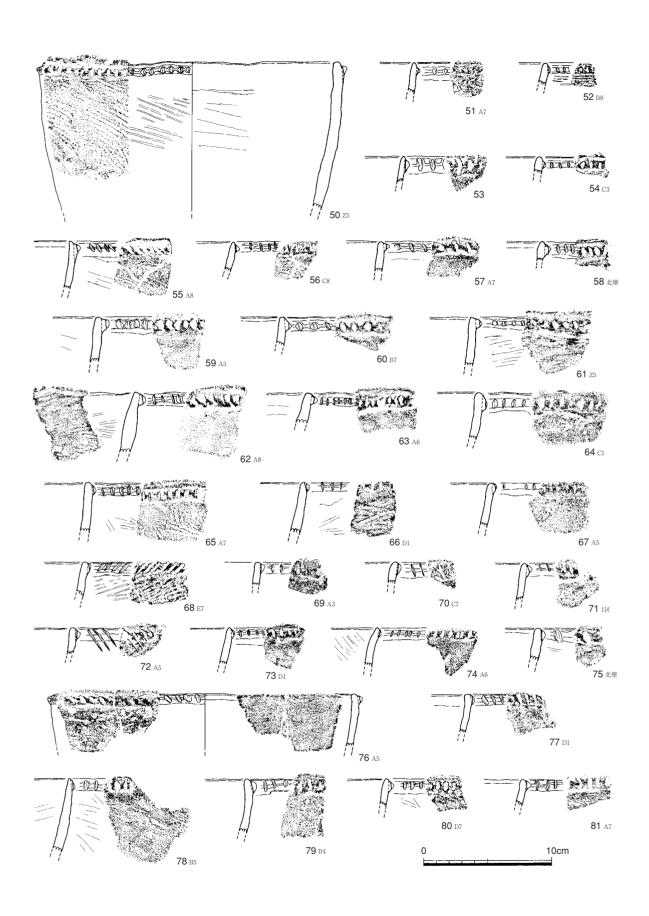
29~103は口縁部から湾曲しながらすぼまる胴部を持つものである。そのうち29~41は突帯位置が口縁部より5mmほど離れたもので、棒状工具による断面U字形の刻目が多い。37は内外面に条痕が残る。42~58は口縁部より2mmほどわずかに下がった位置に突帯を貼り付けたものである。42~51はヘラ状工具による断面V字形の刻目で、52~58は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。49・50・52は外面に条痕が残る。59~81は口縁部に接してやや下向きに突帯を貼り付けたものである。59~61は指頭または棒状工具による丸みをもつ刻目、62~72はヘラ状工具による断面V字形の刻目、73~81は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。68は外面に条痕が明瞭に残り、刻目は斜めにつけられている。72の刻目は深く長く、突帯下部にまで達している。82~99は突帯が口縁部に接して、上面に平坦面を有するものである。82・86は指頭による刻目、87~99は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。86は刻目の下方が盛り上がっていることから、上方から下方への刺突による施文と思われる。刻目の下側に粘土が膨らんでいるものは少ない。91・92は外面に条痕が残る。口縁部上面に平坦面を有するものには断面U字形の刻目が多いように思われる。100~103は口縁部よりも上にはみだして突帯を貼り付けたものである。100~101は断面U字形の刻目、102は指頭による刻目、103はヘラ状工具によるV字形の刻目である。

104~138は直立気味の口縁を持つものである。104~109は突帯位置が口縁部より5mmほど離れたもので、104は指頭による刻目、105はヘラ状工具による断面V字形の刻目、106~109は棒状工具あるいはヘラ状工具による刻目である。105は施文の際のヘラの痕跡が突帯の上下部分にまで及んでいる。110~112は口縁部よりわずかに下がった位置に突帯を貼り付けたもので、110は指頭による刻目、111は棒状工具による円形の刻目、112は断面U字形の長い刻目である。113~124は口縁部に接してやや下向きに突帯を貼り付けたものである。113・114は指頭または棒状工具による円形の刻目、115は貝殻による刻目、116・117はヘラ状工具による断面V字形の刻目、118~124は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。125~134は突帯が口縁部に接して、上面に平坦面を有するものである。刻目は125が貝殻、126~129がヘラ状工具による断面V字形、130~133が棒状工具による断面U字形、134は小さく浅い円形のものである。129・130は条痕が残る。135・138は口縁部よりも上にはみだして突帯を貼り付けたもので、いずれも断面U字形の刻目である。

139・140はやや小型の鉢形土器と考えた。**139**は口縁部より離れた位置に突帯を貼り付けている。ともに内面には条痕が残る。



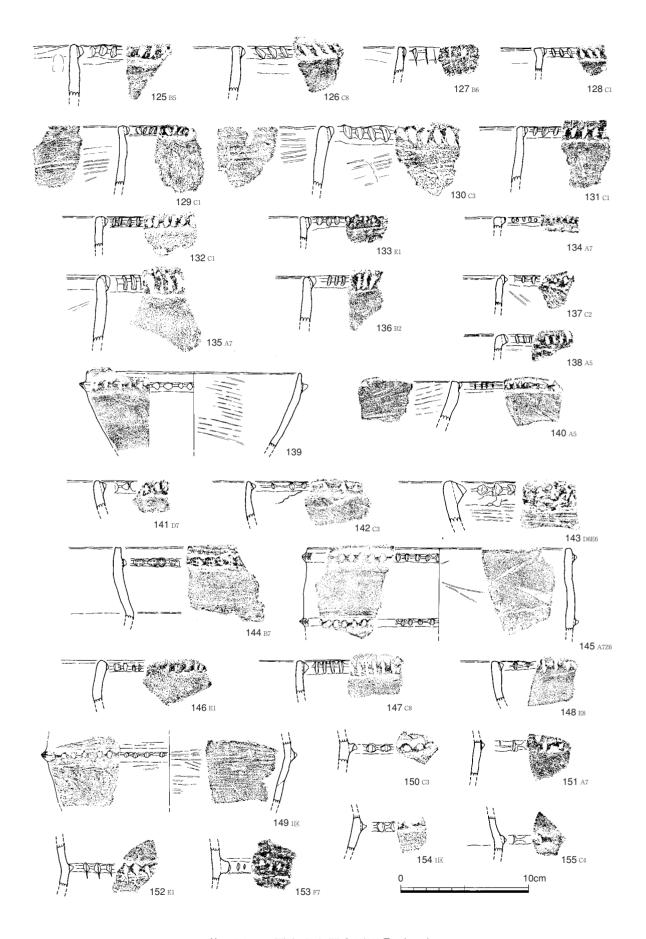
第9図 3層出土土器実測図① (1/3)



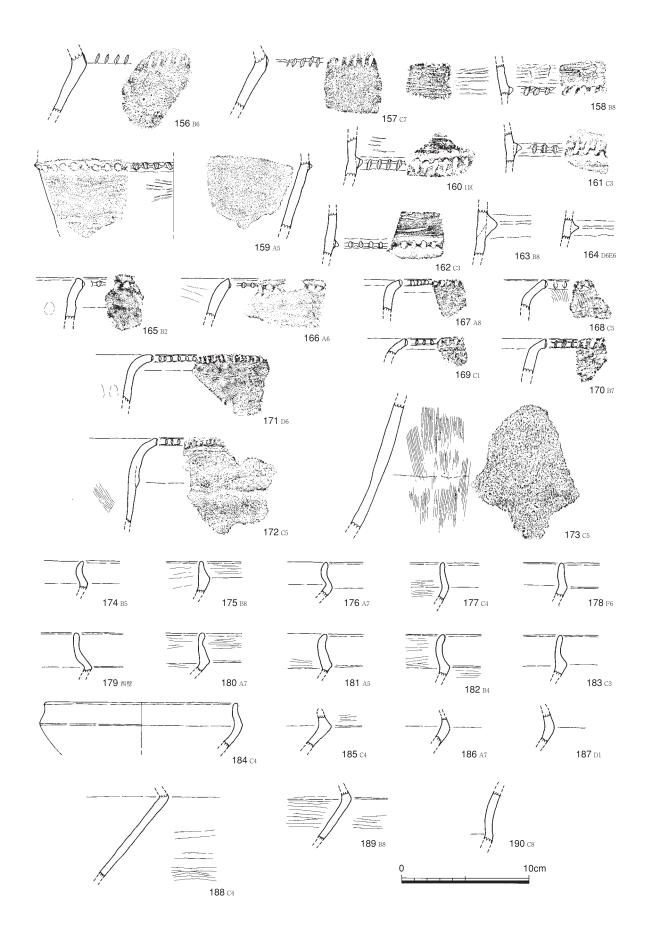
第10図 3層出土土器実測図② (1/3)



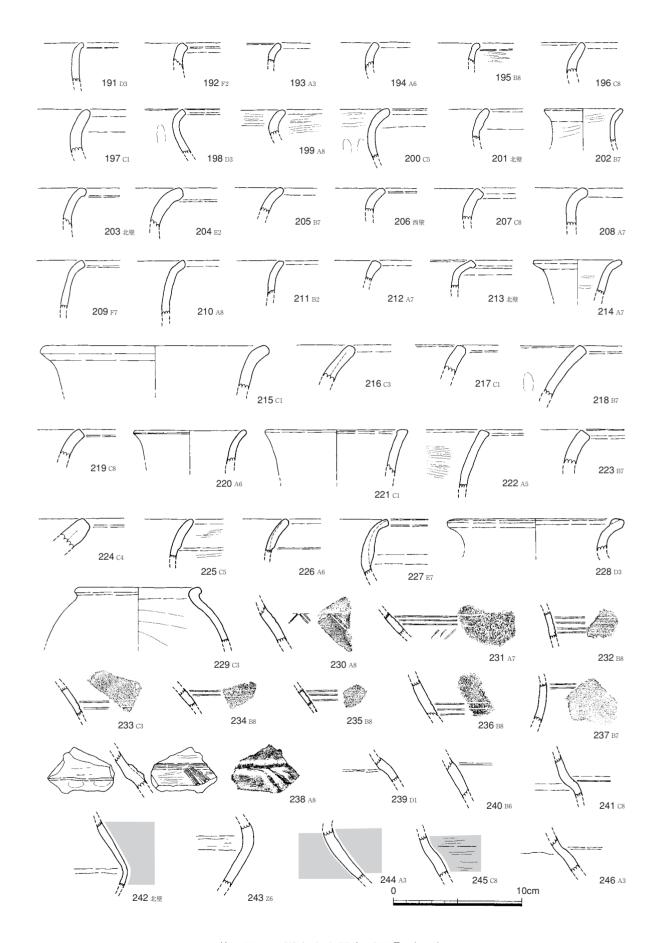
第11図 3層出土土器実測図③ (1/3)



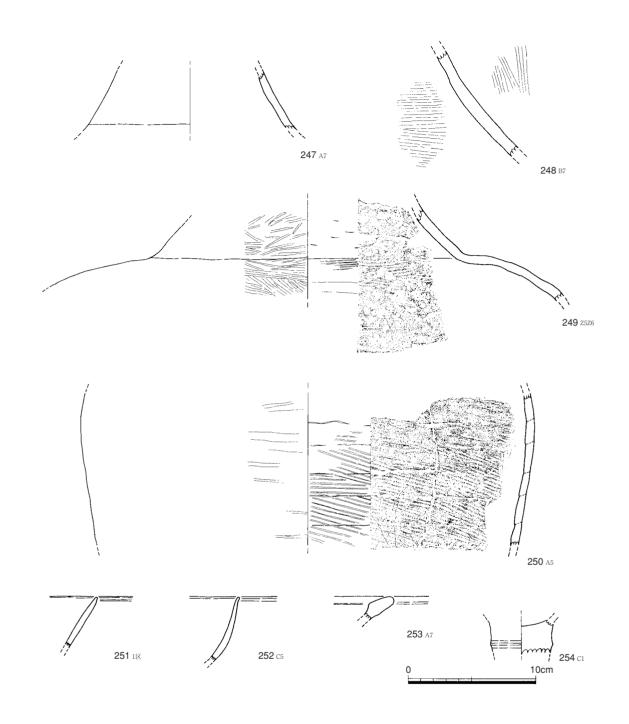
第12図 3層出土土器実測図④ (1/3)



第13図 3層出土土器実測図⑤ (1/3)

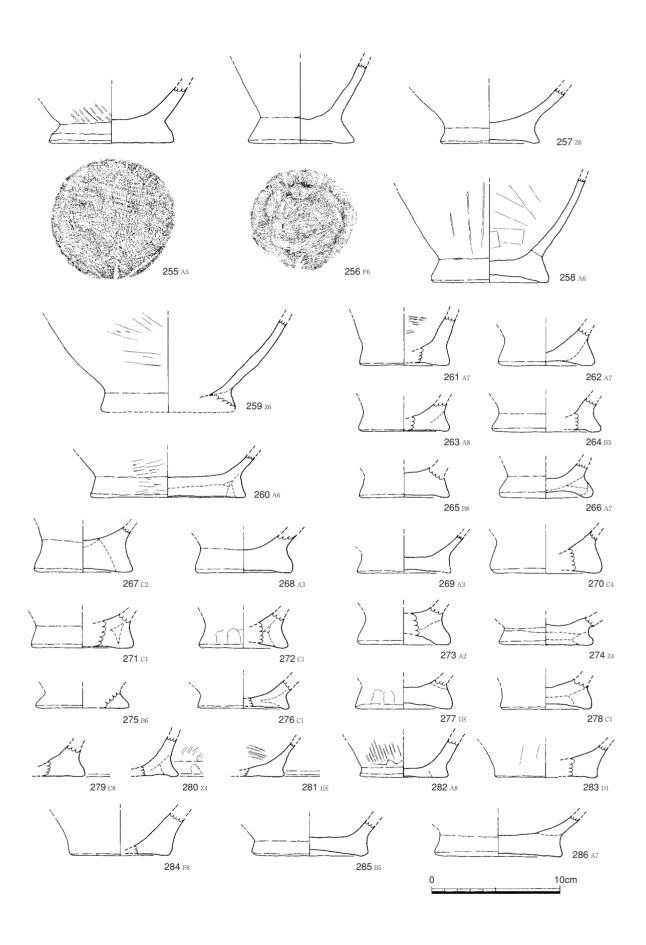


第14図 3層出土土器実測図⑥ (1/3)

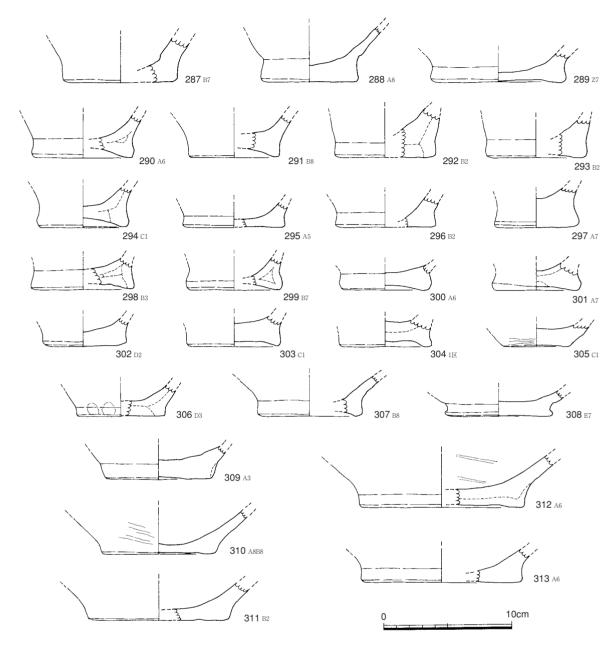


第15図 3層出土土器実測図⑦ (1/3)

141~164は屈曲甕である。口縁部と屈曲部ともに突帯を施すものと、口縁部のみに突帯を施すものが見られる。143は器壁が厚く、突帯も大きい。貝殻で施文されており、1の埋設土器と似た印象を受ける。144は口縁部のみに突帯を施す。刻目は貝殻と思われるが、他に類似の刻目は見当たらず、特徴的なものである。内外面の調整はヨコナデである。145~148は断面U字形の刻目である。 145は屈曲部からほぼ直立する口縁を持つ。149~164は屈曲部破片である。150・154は指頭または棒状工具による円形の刻目、151~153、155~157はヘラ状工具による断面V字形の刻目、158~162は断面U字形の刻目である。大半が断面三角形の突帯であるが、153は断面コの字形の突帯である。163・164は断面三角形の大きな突帯で、ともに刻目を施さないものである。



第16図 3層出土土器実測図⑧ (1/3)

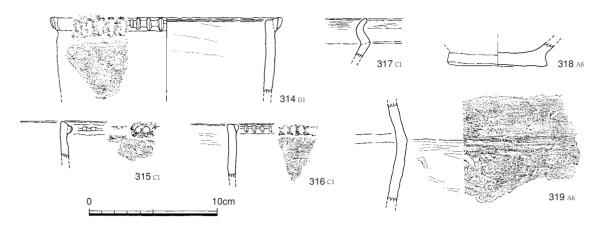


第17図 3層出土土器実測図⑨ (1/3)

165~173は板付系の甕である。165・166は口縁部がわずかに外反し、端部に小さな刻目を施すもので祖形甕と考える。167~172は、くの字形あるいは如意形の口縁で、口縁端部全面に刻目を施している。168は外面にハケメが見られる。172は口縁の下に段を有するものである。173は甕の胴部下半で、外面にハケメが見られる。

174~190は浅鉢である。174~184は口縁部で、端部が鋭く屈曲するもの、湾曲するもの、直線的なものなど、バリエーションがある。研磨を施すものが多い。185~189は屈曲部の破片である。190は小片で器種・傾きが不明であるが、波状口縁をもつ浅鉢の屈曲部と考えた。

191~250は壺である。191~224は夜臼式壺の口縁部と考えたが、高杯の脚部が混じっている可能性がある。直立気味の口縁に端部がわずかに外反するもの、内傾する頸部に口縁が外反するもの、頸部から外側にひらく口縁をもつものなどがある。225~227は口縁部外面が肥厚する板付式壺である。228は口縁部内面を肥厚させるもの、229は肩部で外反しておさめる短頸の壺である。230~



第18図 25・26層出土土器実測図 (1/3)

237は沈線文をもつ肩~胴部破片である。230は複線山形文、他は平行沈線文である。238~250は 頸部・肩部・胴部の破片である。小片のため傾きが不正確なものもある。238は隆線を有する肩部破 片である。頸部と胴部の境目に横方向の隆線が1条、そこから斜め方向に派生する隆線が2条ある。 外面はうすい黒褐色で、横方向の研磨調整。隆線の両側は、隆線に沿って研磨を施している。大洞 系土器との教示を得た。249は大型壺の肩部である。口縁部と胴部を欠くが、肩部はほぼ全体が遺存 する。肩の張りが強い。外面は研磨、内面は条痕が残る。250は大型壺の胴部である。傾き、天地は 不確実である。内面は幅2cm程の粘土紐の単位が明瞭に識別できる。外面の調整は研磨、内面は条 痕が残る。

251・252は椀形土器である。**251**は口縁端部外面が沈線状にわずかに窪んでいる。**253**は高杯の口縁部か。口縁端部内面に段を有する。**254**は高杯の杯と脚の接合部である。段の痕跡がわずかに残る。

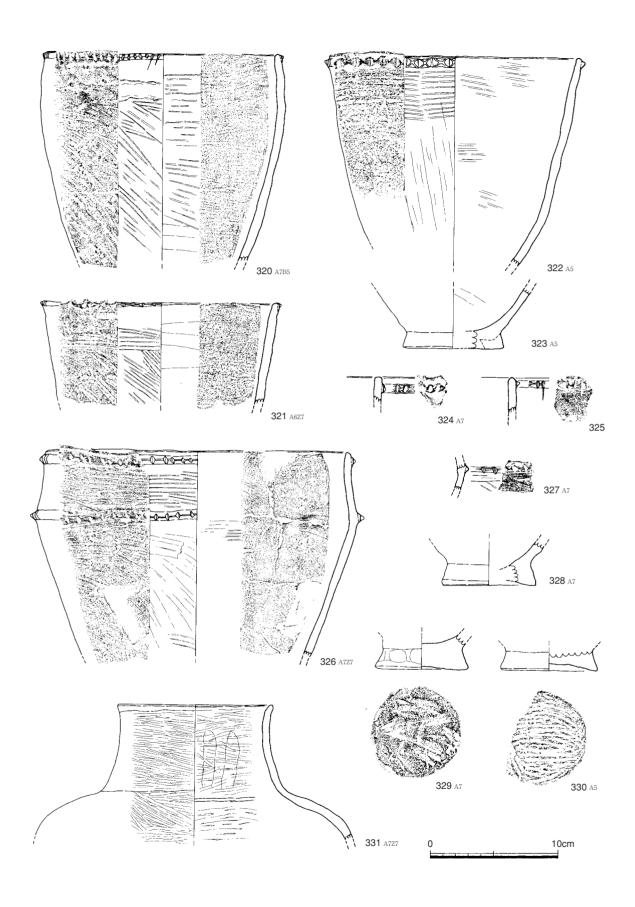
255~313は底部である。接合痕を識別できるものも多い。255~280は外側に張り出す台形状の底部である。255は底部外面に木葉痕が見られる。256の底部外面は不定方向のケズリによりわずかに上げ底となっている。281・282は器壁が薄い。浅鉢の底部であろうか。

25·26層出土土器 (第18図)

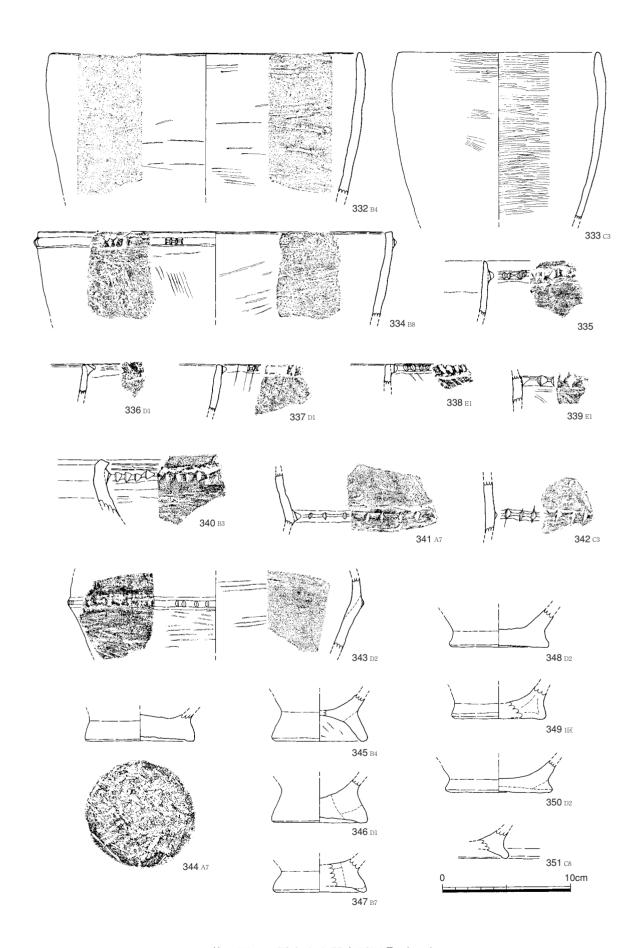
谷の西側肩(B3、C3付近)の3層の下の黄褐色粘質土と黒色土が混じった層から出土した遺物である。314~316は砲弾甕である。314は口縁部より上方にはみ出す突帯を貼り付け、断面U字形の長い刻目を施す。315は棒状工具による小さな丸い刻目、316はヘラ状工具による断面V字形の刻目である。317は浅鉢の口縁部で、端部の外反が鋭い。内外面ともに研磨を施す。318は底部、319は深鉢の屈曲部である。

4層出土土器 (第19図)

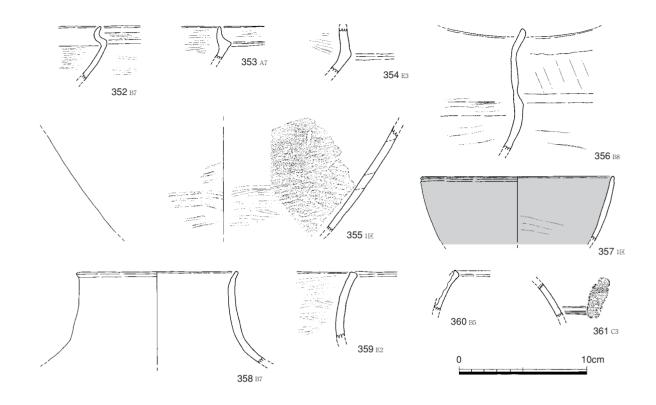
4層は、A5、B5グリッド付近の3層の下で見られた黒色土で、接合復原できた土器が多い。320~322・324・325は砲弾型一条甕である。320の突帯は口縁部に接し、刻目は小さい。内外面ともに条痕が残る。321は直線的な胴部で、突帯は口縁端部にわずかに被さっている。刻目は小さい。外面は条痕が顕著に残る。322はA5グリッドで潰れた状態で出土した(図版3-6)。刻目は指頭による大きなもので、突帯下には横方向の条痕が残る。胴部下半は縦方向の板ナデ、内面にはわずかに条痕が残る。外面には煤が付着している。323は甕の台形状底部である。322と同一個体の可能性がある。326は屈曲二条甕である。刻目は小さめの断面V字形のものである。口縁部と屈曲部の間には横方向の条痕が残り、胴部には斜め方向の擦過痕が見られる。328~330は端部が外側に張り出す台形状の底部である。329・330ともに底部外面はケズリにより上げ底となっている。331は夜臼式の壺である。外面は非常に丁寧な研磨を施している。頸部内面は研磨、肩部内面はケズリである。



第19図 4層出土土器実測図 (1/3)



第20図 5層出土土器実測図① (1/3)



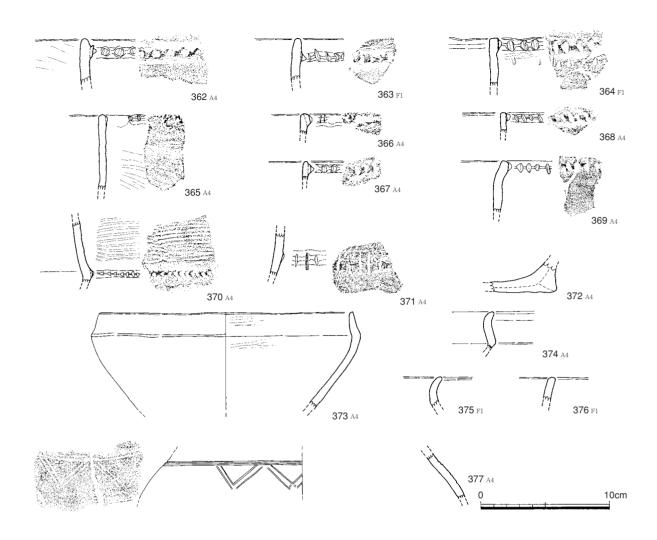
第21図 5層出土土器実測図② (1/3)

5層出土土器 (第20·21図)

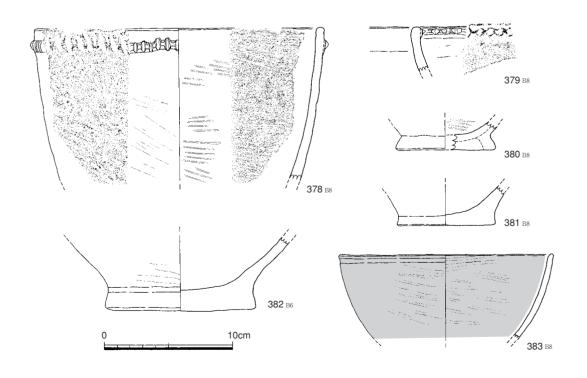
SD02の覆土である。332・333は素口縁の深鉢である。332は内外面に擦過痕が見られる。復原径は不確実である。333は内面及び口縁部外面を丁寧に研磨している。334~338は砲弾甕、339~343は屈曲甕である。334も復原径が不確実である。337・338は刻目施文の際のヘラが突帯下にまで及んでいる。340は器壁の厚い屈曲甕で、口縁端部が若干外反し、非常に角張っている。内面は丁寧なヨコナデで稜線が生じている。343は屈曲部破片であるが、天地が逆の可能性が高い。344~351は底部である。344はケズリにより上げ底となっているが、縁の接地部分には木葉痕が見られる。345は上げ底の著しいものである。352~356は浅鉢である。352は屈曲部から口縁部が短いもので、口縁部が鋭く湾曲して外反する。内外面ともに研磨を施す。353は352に比べて湾曲が緩い。354は屈曲部、355は胴部である。356は波状口縁をもつ浅鉢と考えた。小片のため器種・傾きは心許ない。357は椀形土器である。内外面に丹塗りを施す。口縁端部外面にはわずかに沈線状の窪みが見られる。358~361は壺である。358は直立気味の口縁であるが、小片のため傾きは不確実である。361は壺の胴部で、3条の沈線を有する。

3層、5層出土土器 (第22図)

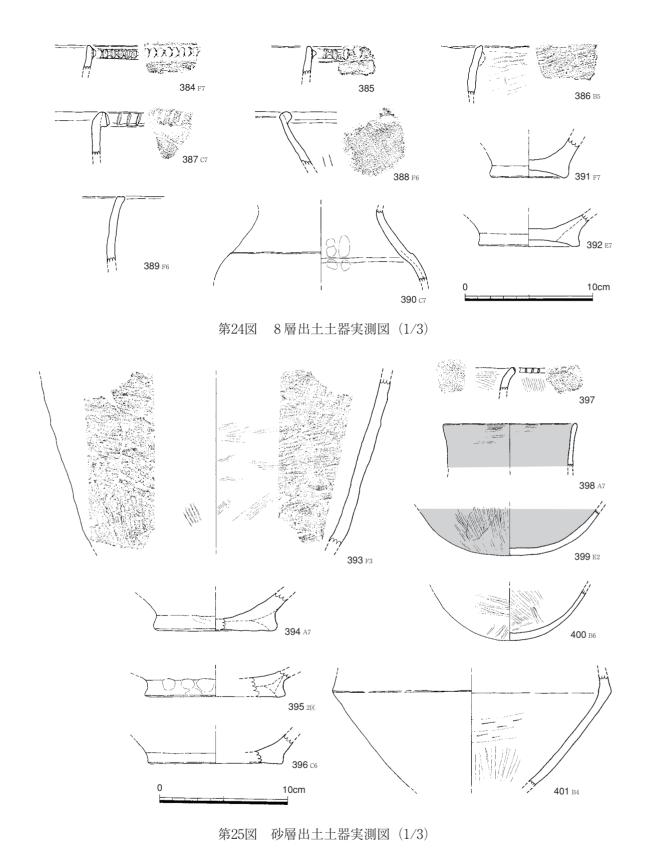
3層と5層を分層する以前に取り上げたもの、トレンチ出土のものなどである。362~368は砲弾 甕である。364は幅2mm程の棒あるいは板状工具による施文の痕跡が突帯下部に残る。369は板付 祖形甕である。口縁部がわずかに外反し、端部に刻目を施す。370・371は屈曲甕である。370は条痕が明瞭に残る。373・374は浅鉢である。373はほとんど湾曲せずに内傾する口縁を有する。内面 に研磨の痕跡が残る。374は口縁端部がわずかに外反する。375~377は壺である。377は肩~胴部の破片で、沈線による複線山形文を施す。



第22図 3、5層出土土器実測図 (1/3)

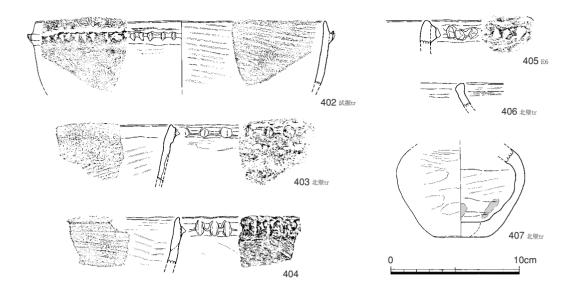


第23図 6層出土土器実測図 (1/3)

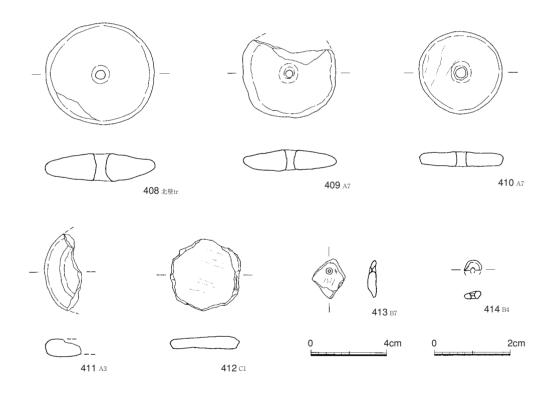


6層出土土器 (第23図)

B8グリッド付近で検出した腐植土層(6P層)である。378は砲弾甕で、口縁部から1cmほど離れた位置に突帯を貼り付ける。棒状工具による断面U字形の大きく深い刻目を施す。外面調整は板ナデ、内面は条痕が残る。外面には大量の煤が付着している。379は屈曲甕で、内外面は丁寧なナデを施す。刻目は貝殻によるものと思われる。380~382は底部である。382は大型のもので、内面に



第26図 層位不明土器実測図 (1/3)



第27図 土製品・玉実測図 (1/2、1/1)

煤が付着している。**383**は椀形土器で、内外面を研磨している。口縁下には沈線上の浅い窪みが見られる。

8層出土土器 (第24図)

384~387は砲弾甕の口縁部である。384は楕円形の刻目が整然と並ぶ。386は突帯が剥落している。388は小片のため不確実であるが、屈曲甕の口縁部と判断した。389は壺で、直立気味の口縁部である。390は壺の頸部~胴部で、口縁を欠く。外面の肩部には緩い段がある。391・392は底部で、ともに上げ底である。

砂層出土土器 (第25図)

393は粗製深鉢の胴部である。内外面とも粗雑な調整である。394~396は底部である。397は口縁が外反する板付式甕で、外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。端部には刻目を施す。398は壺の口縁で、器壁は薄く直立する。内外面ともに丹塗りを施し研磨している。399は壺の底部で、丸底のものである。内外面ともに丹塗りを施し研磨している。400も丸底の底部であるが、大きさからすると椀形土器の可能性もある。同じく内外面を研磨している。401は浅鉢の屈曲部~胴部である。外面は摩滅のため調整不明瞭、内面は研磨とケズリである。

層位不明土器 (第26図)

トレンチや検出時に出土したものである。402~405は砲弾甕である。402は口縁から1cmほど離れた位置に突帯を貼り付け、断面V字形の刻みを施す。内面には条痕が明瞭に残る。403は指頭による刻目で間隔は疎らである。404は棒状工具による断面U字形の刻目である。突帯の歪みが著しい。405は貝殻で施文したものである。器壁は厚く、刻目も大きい。406は浅鉢の口縁部であろうか。外面は研磨を施す。407は小壺の胴部である。内面には丹の跡が残る。415は大型壺の口縁~胴部で、試掘トレンチより出土した。写真のみの掲載である。外面は研磨を施し、内面は摩滅で調整不明。

(2) 土製品·玉 (第27図)

408~**411**は土製紡錘車である。**408**は完形品で直径5.7cm、**409**は直径5.0cm、**410**は完形で直径 4.4cmである。**412**は土製円盤と思われる。**413**は穿孔のある土器片である。**408**は北壁トレンチからの出土、**409**~**413**は3層からの出土である。**414**は天河石(アマゾナイト)の小玉である。B 4 グリッドで3層掘削中に出土した。薄い青緑色を呈し、1/2を欠失している。穿孔は両側から施されている。

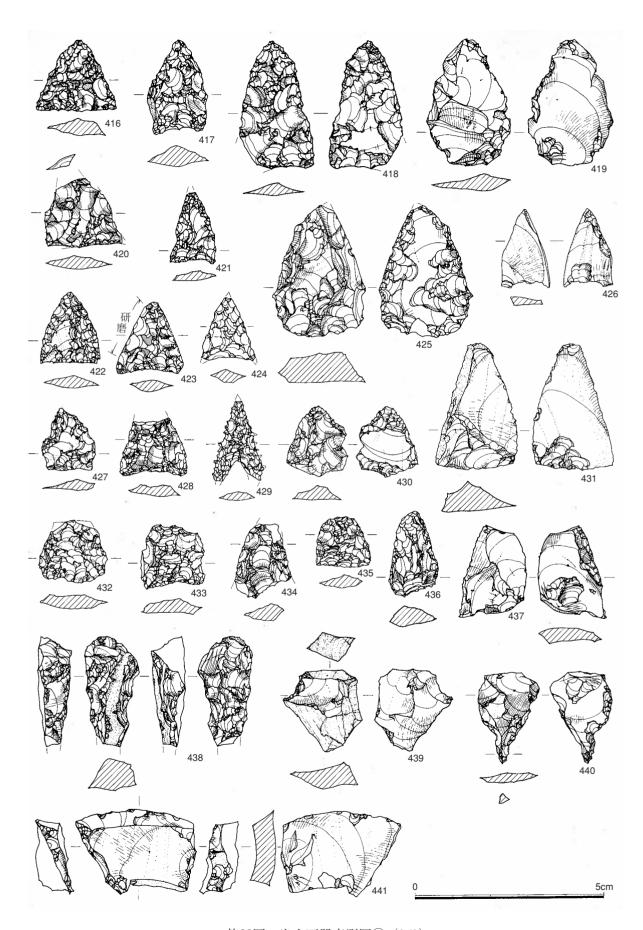
(3) 石器 (第28図~第31図、第1表)

本調査では大陸系磨製石器のほか、多量の黒曜石剥片が出土した。土器と同様に3層からの出土が大部分を占め、4層以下からの出土は少量である。出土石器の数量は、磨製石剣1点、磨製石斧7点(蛤刃4点、扁平片刃3点)、安山岩製石鏃1点、安山岩製削器1点、黒曜石製石器および剥片は531点である。

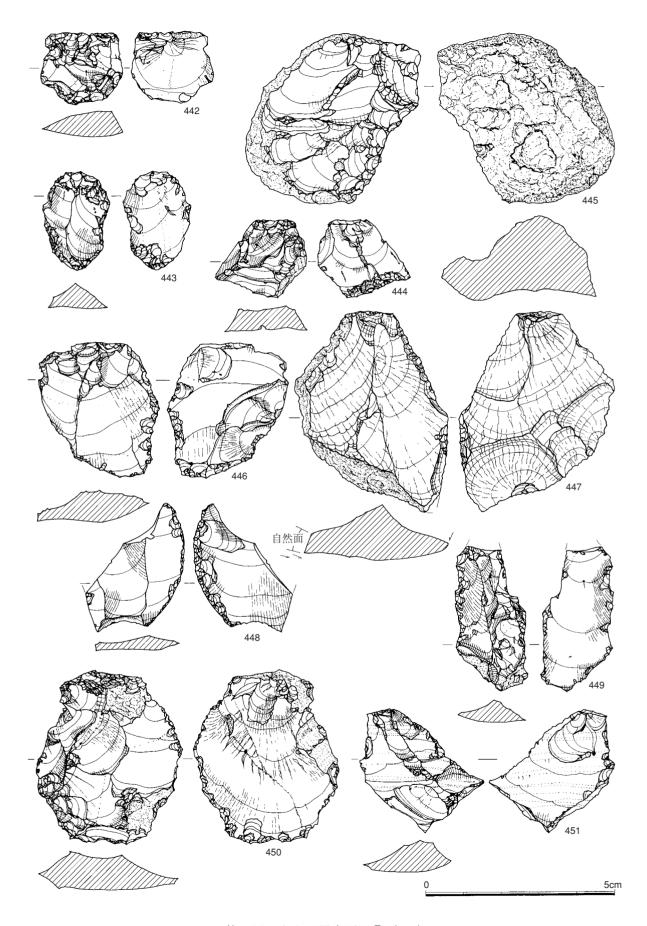
黒曜石製石器・剥片の内訳は、打製石鏃(未製品含む)22点、石錐2点、彫器1点、削器9点、 掻器3点、刃器3点、台形状石器1点、ノッチ状1点、剥片石器3点、使用痕剥片48点、石核・残 核51点、剥片・削片・砕片386点、原石1点である。出土黒曜石の総重量は1999.26g。図化した石器 については観察表(第1表)を作成したので、個別の記述は省略する。写真のみの掲載であるが、 黒曜石原石(469)が1点出土している。

第1表 出土石器観察表

				1			
番号	位置	層	器種	石材	現存法量 (cm)	重量 (g)	備考
416	Α7	3	打製石鏃	黒曜石	$1.90 \times 2.10 \times 0.45$	1.35	表裏とも丁寧な押圧剥離加工。基部平基。横断面凸レンズ状。
417	Z7	3	打製石鏃	黒曜石	$2.5 \times 1.6 \times 0.56$	1.73	表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状。
418	A6	3	打製石鏃	黒曜石	$3.38 \times 1.96 \times 0.36$	2.28	比較的丁寧な押圧剥離加工。基部平基に近い内湾気味。
419	C2	3	打製石鏃	黒曜石	$3.37 \times 2.23 \times 0.47$	3.07	角礫素材の石核剥出剥片を素材とし、剥片左縁辺に表から二次加工。打製石鏃未製品?
420	В8	3	打製石鏃	黒曜石	$2.06 \times 1.84 \times 0.35$	1.25	表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。基部端・先端欠損。横断面凸レンズ状。
421	Z7	3	打製石鏃	黒曜石	1.9 × 1.23 × 0.25	0.46	表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。先端欠損。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状。
422	D1	5	打製石鏃	黒曜石	1.9 × 1.58 × 0.35	0.88	表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。基部平基。横断面菱形。
423	C6	3	局部磨製石鏃	黒曜石	$1.92 \times 1.78 \times 0.31$	0.87	表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。両側及び表裏に研磨。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状。
424	В5	3	打製石鏃	古銅輝石安 山岩	$1.70 \times 1.45 \times 0.34$	0.67	表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状。
425	В7	3	打製石鏃	黒曜石	3.5 × 2.48 × 0.73	6.06	不定形剥片を素材として、打縮を平坦剥離加工で除去し、縁辺に粗い押圧剥離加工。基部外反ぎみの凸基。機 断面台形。未製品の可能性あり。
426	B2	3	打製石鏃	黒曜石	2.10 × 1.30 × 0.21	0.48	不定形剥片を素材として、切断および素材表からの二次加工を加え鏃状に整形している。基部平基に近い内湾。 横断面台形。
427	C8	3	打製石鏃	黒曜石	1.67 × 1.41 × 0.32	0.71	表裏とも粗い押圧剥離加工。基部平基。横断面凸レンズ状。
428	A6	3	打製異形石鏃	黒曜石	1.58 × 1.8 × 0.31	0.85	平面形は台形。表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状
429	В6	3	打製鋸歯鏃	黒曜石	2.13 × 1.37 × 0.23	0.48	表裏とも丁寧な押圧剥離加工。基部凹基。横断面凸レンズ状。
430	SD02	_	打製石鏃	黒曜石	1.80 × 1.60 × 0.35	0.83	不定形剥片を素材として、表裏からの二次加工を加え鏃状に整形している。基部平基に近い凸基。横断面凸レンズ状。
431	D1	3	打製石鏃	黒曜石	3.35 × 2.65 × 0.77	3.84	角礫素材の石核剥出剥片を素材とし、削片打点近くに平坦剥離加工を加え、先端に二次加工が加えられている。未製品?。
432	Z7	3	打製異形石鏃	黒曜石	1.68 × 1.82 × 0.36	1.07	平面形台形。表裏とも比較的丁寧な押圧剥離加工。基部外反ぎみの凸基。横断面凸レンズ状。
433	В8	3	打製異形石鏃	黒曜石	$1.7 \times 1.7 \times 0.38$	1.2	平面形奴形。表裏とも粗い押圧剥離加工。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状。
434	В7	5	打製石鏃	黒曜石	1.98 × 1.52 × 0.42	1.14	表裏押圧剥離加工。基部端・先端欠損。基部平基に近い内湾。横断面凸レンズ状。
435	A6	4	打製異形石鏃	黒曜石	1.38 × 1,43 × 0.34	0.69	平面形台形。表裏とも丁寧な押圧剥離加工。基部外反ぎみ平基。横断面凸レンズ状。
436	A5	-	打製石鏃	黒曜石	2.28 × 1.33 × 0.57		再生品。基部凹基。横断面凸レンズ状。
437	В6	-	打製石鏃	黒曜石	2.45 × 1.8 × 0.4		 角礫素材の石核剥出剥片を素材とし、剥片右縁辺に表から二次加工。打製石鏃未製品?
438	C6	3	石錐(ドリル)	黒曜石	2.91 × 1.46 × 0.90	341	角礫の表皮が残る分厚い剥片を素材として、主要剥離面には平坦剥離加工を加え、両側縁には角度のある二次
		_				0.11	加工を主要剥離面から加え、横断面形台形に整形しているが、錐部は破損している。
439	A6			黒曜石	2.20 × 2.10 × 0.63		角礫素材の石核から剥出された不定形剥片の縁辺の一部に、二次加工により抉りを入れ、鋭い刃を作り出している。
440	В7	3	石錐(オール)	黒曜石	2.42 × 1.62 × 0.3	1.11	不定形剥片を素材として、先端に表裏から二次加工を加えて横断面形三角形となる鋭い錐部を作り出している。 縦長剥片を素材として素材先端を切断し、切断面・打面に主要剥離面から刃潰し状の二次加工を加えて台形状
441	А3	3	台形状石器	黒曜石	$2.27 \times 3.2 \times 0.59$	5.21	
442	_	-	掻器	黒曜石	$1.92 \times 2.17 \times 0.65$	3.16	寸つまりの剥片を素材とし、先端に、主要剥離面から角度のある二次加工を加え鋭い刃を作り出している。
443	ВЗ	3	削器	黒曜石	$2.64 \times 1.78 \times 0.64$	2.66	不定形剥片の縁辺に、表裏から二次加工を加え鋭い刃を作り出している。
444	ВЗ	3	削器	黒曜石	$2.10 \times 2.44 \times 0.61$	2.95	角礫を素材とする石核から剥出された不定形剥片の先端に、素材表から二次加工を加え鋭い刃を作り出している。
445	В8	3	掻器	黒曜石	4.50 × 4.68 × 2.1	39.82	酸砕角礫を素材として、平坦な自然面から角度のある二次加工を加え鋭い刃を作り出している。パティナの層 化状態から、先土器時代か縄文時代の所産。
446	_	3	削器	黒曜石	3.58 × 3.20 × 0.80	7.89	剥片の先端から縁辺にかけて、表裏から二次加工を加えて鋭い刃を作り出している。
447	D7	3	削器	古銅輝石安	5.3 × 4.05 × 1.45		自然面が残る不定形剥片の自然面が残る右側縁に、主要剥離面から二次加工を加えて鋭い刃を作り出している。
				山岩			
448	- 4.5	_	削器	黒曜石	3.40 × 2.60 × 0.38		幅広の剥片を素材として、右側縁に、素材表から二次加工を加え鋭い刃を作り出している。
449	Α7	3	刃器	黒曜石	3.82 × 1.83 × 0.61	3.73	角碟を素材とする石核から剥出された縦長剥片の両側縁に、主要剥離面から二次加工を加えている。 角碟を素材とする石核から剥出された縦長剥片の縁辺に、主要剥離面から二次加工を加え鋭い刃を作り出して
450	D2	3	削器	黒曜石	$4.60 \times 3.85 \times 0.95$	16.54	おり、刃部には使用と考えられる磨耗痕が見られる。
451	В8	6	剥片石器	黒曜石	$3.30 \times 3.30 \times 0.90$	6.19	不定形剥片の縁辺に、粗い二次加工を加えて鋭い刃を作り出している。
452	_	3	彫器?	黒曜石	$3.90 \times 2.25 \times 0.65$	3.63	不定形剥片を素材として、素材打点をとばす形で樋状剥離を数回繰り返し、鋭いエッジを作り出している。
453	B7	3	刃器	黒曜石	$3.35 \times 2.10 \times 0.77$	4.6	角礫素材の石核から剥出された縦長剥片の右側縁の一部に、主要剥離面から二次加工を加えて鋭い刃を作り出 している。また、両側縁には使用によると考えられる刃こぼれが見られる。
454	ЕЗ	5	使用痕剥片	黒曜石	2.70 × 2.10 × 0.78	3.15	角礫素材の石核から剥出された不定形剥片の縁辺に、使用によると考えられる刃こぼれが見られる。
455	В7	3	刃器	黒曜石	2.53 × 2.33 × 0.58	3.14	■ 角礫素材の石核から剥出された寸つまりの剥片の両側縁に、主要剥離面から二次加工を加えて鋭い刃を作り出
						3.53	している。 不定形剥片の主要剥離面基部近くに、打縮を除去する平坦剥離加工が加えられており、縁辺には使用によると
456	A6	3	使用痕剥片	黒曜石	3.05 × 2.89 × 0.44		考えられる刃こぼれが見られる。 角礫素材の石核から剥出された縦長剥片の縁辺の一部に、二次加工を加えているほか、両側縁には使用による
457	C1	3	使用痕剥片	黒曜石	2.84 × 1.33 × 0.33	0.95	と考えられる刃こぼれが見られる。
458	2区	_	使用痕剥片	黒曜石	$3.34 \times 2.61 \times 0.46$	3.48	円礫素材の石核から剥出された自然面を多く残す不定形剥片の右側縁に、使用によると考えられる刃こぼれが 見られる。パティナの風化状態から先土器時代の所産か。
459	C7	3	削器	黒曜石	4.26 × 2.38 × 0.72	6.4	角碟素材の石核から剥出された縦長剥片の自然面が残る右側緑に、主要剥離面から二次加工を加えて鋭い刃を 作り出している。
460	ВЗ	3	剥片石器	黒曜石	2.50 × 2.90 × 0.55	3.0	すつまりの剥片の先端に、素材表から二次加工を加えている。
461	В2	3	石核	黒曜石	2.65 × 2.56 × 1.58	10.4	角碟の分割打面から表皮を剥ぐように剥片剥出を行っているほか、分割時の先端の主要剥離面を打面として剥けた割出を行っている。
462	A7	3	方柱状 (扁平) 片	頁岩	6.65 × 2.25 × 1.1		片剥出を行っている。 剥離・蔵打で平面形長方形に整形した後に入念な研磨を加え、横断面形は蒲鉾形に仕上げている。
			刃石斧 ロエドコエタ	凝灰岩ホル			同学 「
463	E8	3	扁平片刃石斧	ンフェルス	6.45 × 3.0 × 1.25	48.61	端部に研磨により角度のある刃を作り出し、横断面形は長方形に仕上げている。 扁平な素材を用い剥離・蔵打で平面形長方形に整形した後に入念な研磨を加え、横断面形は長方形に仕上げて
464	2 ⊠	-	扁平片刃石斧	頁岩	4.25 × 1.8 × 0.85	27.15	いる。刃部欠損後は仕上げ砥石として使用か。
465	C8	3	磨製石剣	頁岩	4.15 × 2.65 × 0.59	5.61	表裏とも入念な研磨を加え、横断面形は菱形に仕上げている。鋒のみ残存
466	SD01	3	太型蛤刃石斧	玄武岩	12.0 × 6,65 × 4.9	528.92	蔵打整形後、頭部から体部にかけ入念に研磨を加え、半円状の頭部を作り出し、横断面形は楕円形に仕上げている。使用中に欠損したものか。今山産出玄武岩と思われる。
467	-	5	加工具未製品	安山岩	11.8 × 8.2 × 4.55	548.25	扁平な礫を素材とし、一部蔵打加工を加えている。
468	E2	3	蛤刃磨製石斧	不明	9.1 × 5.2 × 2.2	101.11	蔵打整形後、表裏から刃にかけては丁寧に、側縁は蔵打痕が残る程度にかるく研磨を加え、横断面形は楕円形 に仕上げている。使用中に欠損した刃部片。
469	В8	3	原石	黒曜石	6.0 × 5.8 × 2.7	103.65	* IMMON 7 * 0 IA/W 1 T-7AM 0/1-74 HP/10
-							



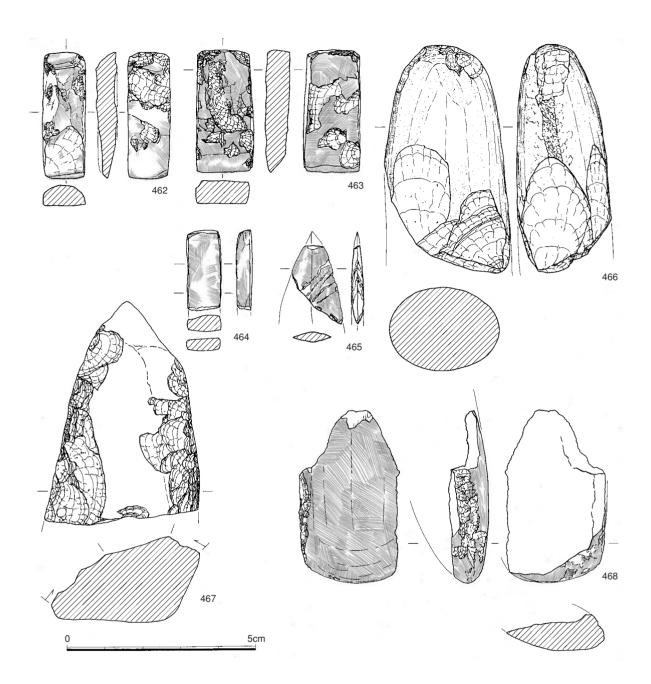
第28図 出土石器実測図① (1/1)



第29図 出土石器実測図② (1/1)



第30図 出土石器実測図③ (1/1)



第31図 出土石器実測図④ (1/1)

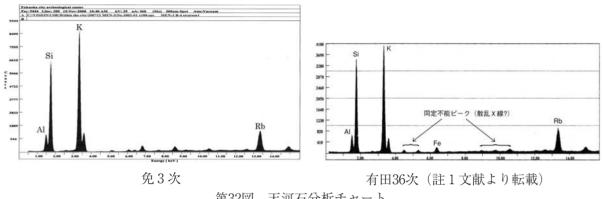
第4章 おわりに

(1) 天河石 (アマゾナイト) について

3層より出土した小玉 (414) の石材を確認するため、蛍光 X線による含有元素分析を行った。第32図が分析結果である。比佐陽一郎氏は有田遺跡群第36次調査出土アマゾナイトの分析を行い、アマゾナイトの特徴としてアルミニウム、珪素、カリウム、ルビジウムのピークを指摘し、特にルビジウムが他の石材では見られないほど強く検出されるとしている (註1)。免遺跡第3次資料と有田遺跡群第36次資料の分析結果は酷似しており、このことから免3次資料の石材は天河石と判明した。

これまで福岡市内において天河石は2例確認されている。ひとつは上述した有田36次のもので、 弥生時代中期の甕棺上方の覆土から出土している。もう1点は今宿5次調査で確認されており、金 海式甕棺の覆土から出土している。免3次資料は夜臼式・板付式土器共伴期に該当するもので、福 岡市内の例では最も古いものとなる。近い時期の事例としては、福津市の今川遺跡でアマゾナイト 製の勾玉・丸玉の出土がある。

註1 比佐陽一郎2007「4.元岡・桑原遺跡群第27次調査出土石製小玉の石材について」 『元岡·桑原遺跡群9』福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第963集 福岡市教育委員会



第32図 天河石分析チャート

(2) 大洞系土器について

3層より隆線を有する壺形土器(238)が出土したが、北部九州において隆線重弧文土器の出土例 は少ない。類例としては、福岡市内では雀居遺跡(第10次・12次)、板付遺跡(第60次)、その他で は佐賀県唐津市大江前遺跡、佐賀県佐賀市久保泉丸山遺跡など10例に満たないようである。免3次 資料は特徴から大洞C2式併行との御教示を得た。出土した3層は夜臼式・板付式土器共伴期である が、時期幅はあるように思われる。形態的には、頸部と肩部の境に横方向の隆線1条、弧状の隆線 2条を持つ点で大江前遺跡例と似ている。その他の例は横方向の隆線ではなく沈線となっている。

(3) 圧痕資料について

出土土器には種子圧痕の見られる土器片があった。土器片を全て観察した山崎純男氏によると、 7点にイネ・アワ・キビなどの圧痕が確認された。図化した土器のうち、340には胎土の中にイネの 種子が、381には種類不明の種子が見られる。382には底部外面にイネの圧痕が見られる。その他、 図化していない土器片にアワもしくはキビ、種類不明の圧痕を持つものが4点ある。

(4) まとめ

免3次地点は過去の周辺調査と同じく沖積地の調査であったが、本地点では湧水もなく杭列や堰 といった構築物・水田遺構も確認されなかった。本調査地点は自然流路の窪みと谷部が、湿地状態 で徐々に埋没していく過程で土器が堆積したものと思われる。また、谷の落ち際には投棄されたと 思われる土器もあることから、本地点南西側の微高地上には集落が存在していた可能性が高いが、 削平により失われたものと思われる。谷部からの出土遺物で見ると、4層以下は板付式土器をほと んど含まず、器面調整も粗雑なものが多い。粗製深鉢、椀形土器、直口ぎみの壺などが出土してお り、3層に比べて古相を示すように思われる。4層以下は突帯文土器単純期、3層は突帯文土器・ 板付式土器共伴期に当たると考える。出土遺物には韓半島からの搬入品である天河石や、東日本の 影響を受けた隆線を有する土器が見られ、遠隔地との交流を窺うことができる。



1. 1区砂層上面全景(北より)



2. 1区砂層上面全景(西より)



3. 1区完掘状況(北より)



4. 1区完掘状況(西より)



5. 2区砂層上面全景(東より)



6. 2区完掘状況(東より)



1. 北壁土層 (南東より)



2. A-6~C-6 土層 (南より)



3. B-3~F-3 土層 (南東より)



4. 試掘トレンチ西壁土層(南東より)



1. SD01完掘状況 (南より)

2. SD02 (北より)



3. SD03完掘状況 (北より)



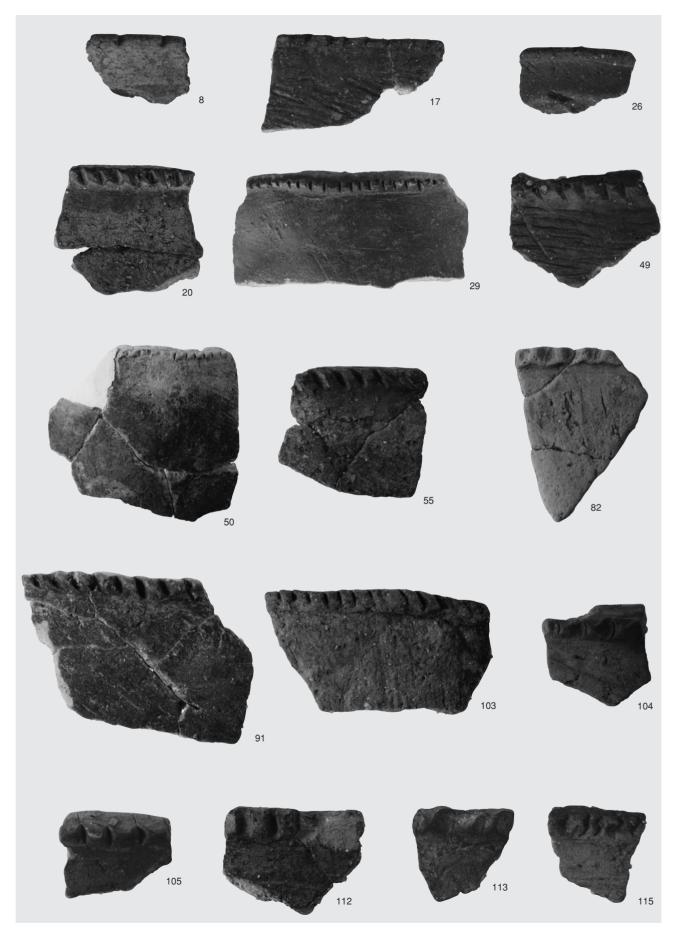
4. SD03完掘状況 (南より)



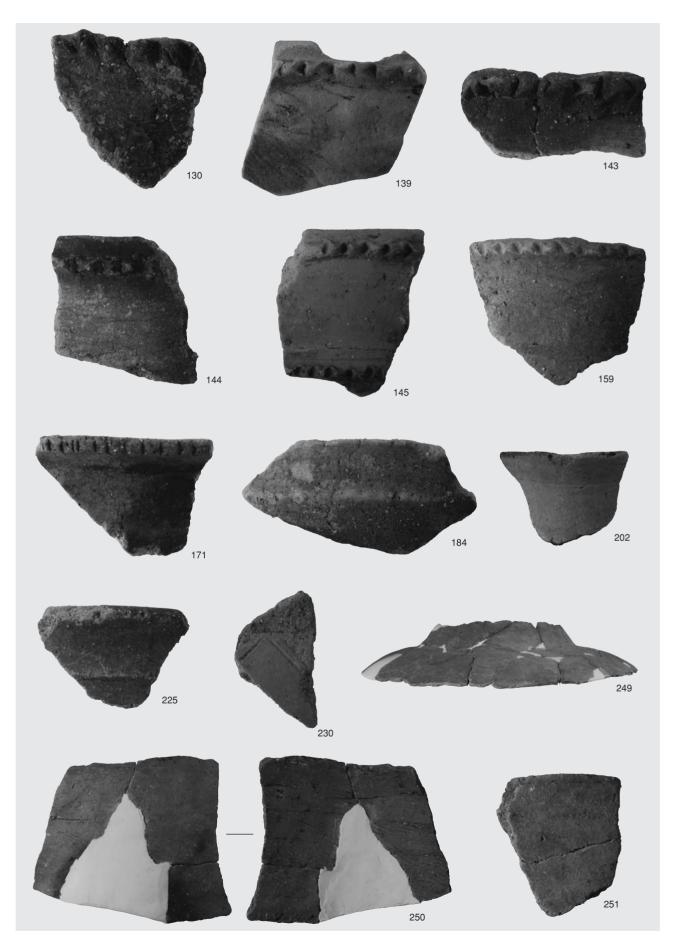
5. 埋設土器出土状況(北より)



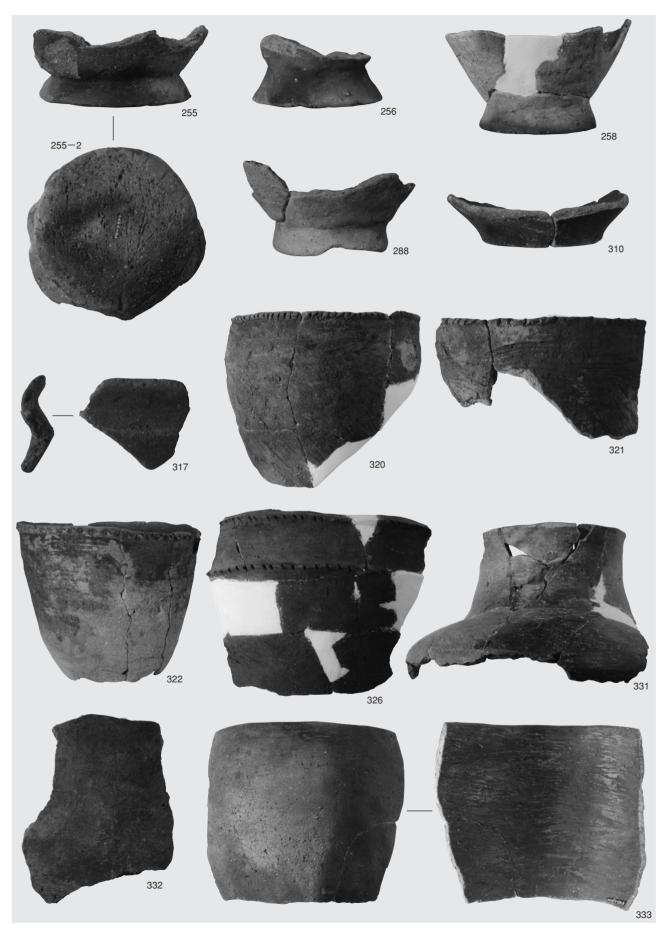
6.322出土状況(北より)



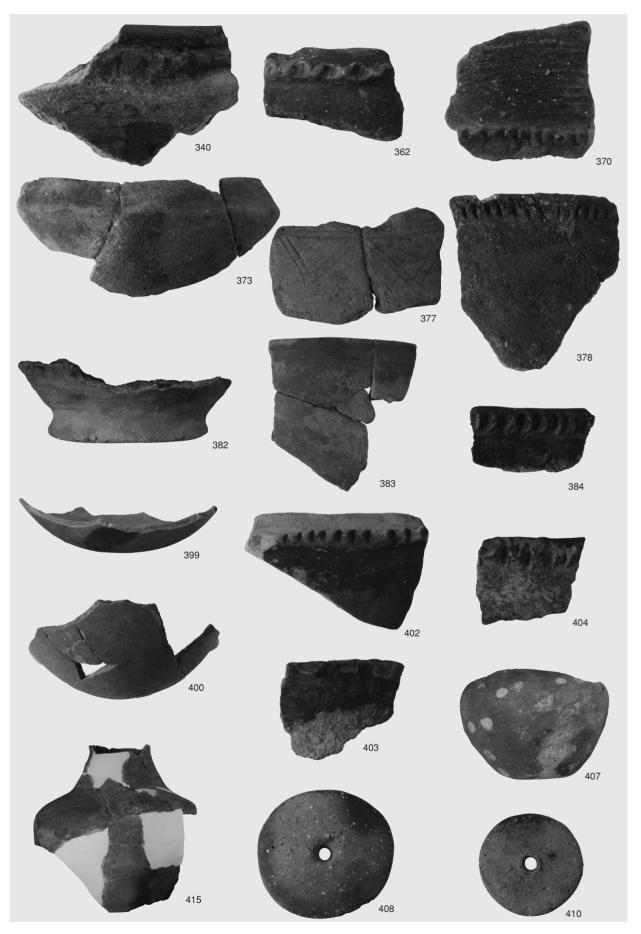
出土遺物 I (縮尺不同)



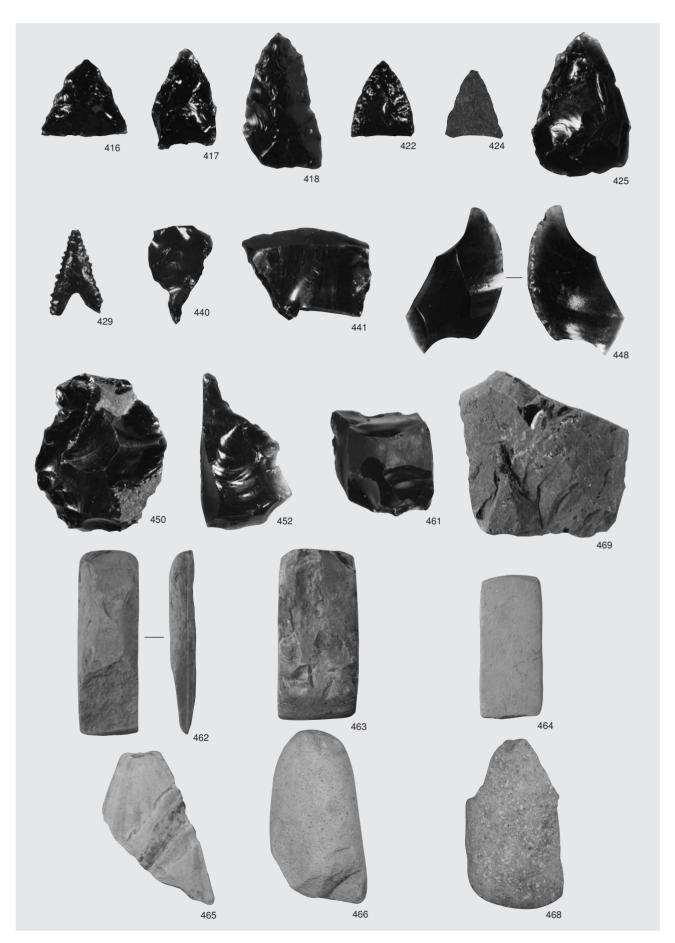
出土遺物Ⅱ (縮尺不同)



出土遺物Ⅲ (縮尺不同)



出土遺物Ⅳ (縮尺不同)



出土遺物 V (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	<i>b A</i>	めんいせき2									
書 名	免過	免遺跡 2									
副書名	第3	第 3 次調査報告									
巻 次											
シリーズ名	福岡	福岡市埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第 第1	第1059集									
編集者名	今井	今井隆博									
編集機関	福岡	福岡市教育委員会									
所在地	₹8	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1									
発行年月日	200	2009年3月31日									
調査機関	200	2007年5月14日~2007年6月29日									
調査面積	250	250m ²									
調査原因	河川	河川改修工事									
ふりがな		ふりがな		コード		北緯		東緯			
所収遺跡名		所在地		市町村	遺跡番号	(†	世界測地系)	(世界測地系)			
%	福岡	福岡県福岡市早良区 賀茂4丁目		40137	0318	33	3° 33′ 10″	130° 20′ 20″			
所収遺跡名	所収遺跡名 種別 主な時代		主な遺	遺構	主な遺物		特記事項				

埋設土器

自然流路

遺物包含層

集落

遺物包含地

弥生

免遺跡

第3次

突带文土器

板付式土器

磨製石器

剥片石器

天河石

谷部、自然流路から刻目突帯文

土器を中心とする多量の遺物が

出土した。

免遺跡 2

一第 3 次調查報告— 福岡市埋蔵文化財調查報告書第1059集

2009年(平成21年) 3月31日

発行 福 岡 市 教 育 委 員 会 福岡市中央区天神1-8-1 (092) 711-4667

印刷 松影堂印刷株式会社 福岡市博多区吉塚5丁目13-40 (092) 622-7971